

## 質の高い大学教育推進プログラム 実施状況報告書

大 学 等 名	札幌市立大学		
取 組 名 称	学年別OSCEの到達度評価と教育法の検討		
申 請 区 分	教育方法の工夫改善を主とする取組		
取 組 期 間	平成20年度～平成22年度（3年間）		
取 組 学 部 等	看護学部看護学科	取組担当者	中村 恵子
W e b サ イ ト	<a href="http://www.osce.scu.ac.jp/">http://www.osce.scu.ac.jp/</a>		
取 組 の 概 要	<p>本取組は、学生が4年間で学ぶ看護技術について、学年毎にどこまで達成できたかを評価する基準を作り、模擬患者（市民ボランティア）の育成・協力を得て客観的臨床技能試験（OSCE）を行い、学生の自己学修を促すとともに、全教員の参加により継続的な看護教員のFD（Faculty Development）活動に繋げるものである。</p>		

### 1. 取組の実施状況等

#### ①. 取組の実施状況 【1ページ以内】

##### （1）取組の実施体制

看護学部の全教員が関わること、その責任者は学部長であることを全員で確認し、申請書に掲げた実施体制のとおり、看護学部教員を中心に実施体制を組織し、臨地実習指導者や市民を含めた学外との連携を図りながら本取組を進めた。また、本取組を円滑に実施するために看護学部 GP 推進会議を中心とし、学部委員会及び全学委員会などとの協力支援を充実させて実施した。

##### （2）取組の実施計画に掲げた内容

##### ①取組の全体スケジュール及び各年次の実施計画

申請書に掲げた実施計画に基づき、前年度の状況を踏まえ、実施時期を調整しながら概ね計画通りに進行した。

##### ②取組に参加する教職員と学生の数等

取組に参加した教職員数は、平成20年度48名、平成21年度49名、平成22年52名である。また、学生については、主体性を尊重し学生個人が意思決定の後にOSCEに参加した。参加者数は同年度順に186名、146名、209名である。なお、教員を補助する実技指導インストラクターは各年度3名配置し、事務補助員を各年度1名配置した。

##### （3）社会への情報提供活動

- ・ 年度ごとに視覚的効果を意識したテーマカラーを選定してパンフレット作成し、道内外の関係大学及び臨地実習施設等延べ1949か所へ発送した。
- ・ 平成20年12月にWEBサイトを立ち上げ、時宜を得た情報発信を行うとともに、文部科学省が支援するWEBサイト「GPポータル」へのコンテンツ登録をした。
- ・ OSCE実施当日にDVDを撮影し、教員の研修用及び公開用として提供した。
- ・ 平成20・21年度の教育GP合同フォーラムのポスターセッションに参加した。
- ・ 各年度において成果報告会・意見交換会を開催し、延べ362名が参加した。
- ・ 学会発表、他大学等における研修会、シンポジウム等において延べ16回の講演等を行った。
- ・ OSCE実施当日に、他大学等からの視察者延べ21名を受け入れた。
- ・ 北海道新聞1回、週間医学界新聞2回の他、雑誌や書籍においても本取組が紹介された。

## ②. 取組の成果 【1 ページ以内】

- ・ 実技指導インストラクターを3名雇用し、技術学習の指導や評価を受けられる教育環境によって、学生が自主学習できる環境を整備し、学生の学習の意欲の向上を図るとともに、自主学習内容の一層の修得・向上が見られた。
- ・ ホームページ、パンフレットの作成・更新によって、本学の取組を広く周知することにより学内外の関心を高め、本取組の他大学等への啓発・波及に寄与した。
- ・ 本学で養成した31名の模擬患者に対し継続的にフォローアップを行うことで、模擬患者としての役割について理解が深まり、学部教育(演習等の指導延べ134名)やOSCEでの教育効果が高まった。
- ・ 前年度の授業評価を受けて次年度の教育内容を調整し、学生の理解を促すとともに、教員の教育方法等を改善することで、教員の教育力の向上を図るとともに、学生の教育環境の改善につながった。
- ・ 各学生自身が記入している看護実践記録用紙により、各年次における看護実践状況達成度を把握し、OSCEの課題を設定する上での基礎データとして活用することによって、学年別の課題の適切性を検討し、OSCE実施時の教育上の効果が向上した。
- ・ フォーラム・ワークショップや成果報告会の開催による他大学との継続的かつ発展的交流を通じて、教育GP選定理由であった「看護OSCEの波及効果」の実現につながった。また、評価技能を向上させるための方法論を、演習を交えて学習し、評価者間の不一致や学生へのより良いフィードバックへの活用につながった。
- ・ 2種類の質問紙調査による調査結果から、卒業生の就労状況とキャリア発達を追跡し、OSCE実施による教育効果を分析するとともに、本学部の育成する人材像との連動性を点検した。特に、看護実践能力の水準について得られた知見を、平成23年度以降の教育改善、および継続学修を展望したキャリア支援体制の構築に役立てている。
- ・ 毎年、合同フォーラムへ参加することにより本学の取組をPRし、情報収集ができ、本取組の評価や改善を図ることを可能にした。
- ・ 1年～4年までの各学生に対しOSCEを実施し、フィードバックすることによって、本人が客観的な到達度評価を認識でき、各学生の意識の改善を図り、更なる臨床技能の向上につながった。
- ・ 毎年、実習先から担当者を招いて臨地実習指導者会議を開催し、OSCEの課題等について意見交換を行うことで、課題及び評価の適正化を図るとともに、本取組について広く周知を行い、他の教育機関への波及につながった。
- ・ 学生の到達度評価および教員の教育力評価の2側面について分析・総括することによって、教育活動の成果、教育理念や教育目標との整合性および管理運営システムの妥当性を検証した。
- ・ 学生の到達度評価を踏まえ、設定した学年別到達目標を再検討することで、より適切な卒業時の到達目標へと精選され、教育方法についても再検討を行うことで、教育環境の向上につながった。
- ・ 毎年3月に教育GPの成果報告会を実施し、外部の教員・実践者から広く評価を得るとともに、今後に向けて提案や提言を受けて本学の教育に反映させた。また、他の教育機関の関心を喚起し、「育てるOSCE」として実践力育成に寄与するとともに普及啓発につながった。

### ③. 評価及び改善・充実への取組 【1ページ以内】

本取組の教育評価は、推進組織の中の実践評価部門及び学年別検証部門が担当し、看護学部 GP 推進会議において総括評価を行った。

実践評価部門は、学生の到達度評価及び教員の教育力評価を行った。具体的には、

- ・ 本学デザイン学部教員と共同研究により開発した「Mulberry-Ozone システム」により、OSCE 実施時の進行管理とともに学生の個人評価を即日処理した。
- ・ 課題の内容等について、OSCE 実施直後に学生アンケートを行い、課題の理解度や適切さ等を調査し、その結果を教育改善や課題作成に生かした。
- ・ 各学年の課題の評価項目について教員アンケートを行い、評価のしやすさ等を調査し、その結果に基づく F D や課題作成に生かした。
- ・ 指導力やフィードバック能力、調整能力の向上の有無について教員アンケートを行い、教員への効果を教員同士が共有するとともに、実施に伴う疲労度についても調査し、作業分担の平滑化など運営実施に役立てた。
- ・ OSCE 終了後に、学生有志を対象に 1 対 1 の個別インタビュー(一人約 20 分間の半構造化面接)を行い、OSCE 実施後の専門科目への反映、運用上の改善点を調査した。

学年別検証部門は、OSCE 課題の学年別難易度の検証を行った。具体的には、

- ・ 授業内容と OSCE 課題の設問項目の整合性を可視化するため、本学の専門科目について知識レベル・実践能力レベル別の到達度と OSCE 出題が可能な項目を一覧表に示した SCU OSCE MAP を作成し、課題やシナリオの作成に役立てた。
- ・ 臨地実習別に看護実践レベルの変化を記載した看護実践記録用紙を定期的に回収し、学生の学修進度と看護実践力に関する自己評価状況を集計・分析した。
- ・ 卒業時の到達度評価を行うために作成された複合領域による卒業時 OSCE 課題について、設問項目と学年別 SBO (行動目標) の整合性を分析し、全学年の SBO に連動した課題構成であることを確認した。

看護学部 GP 推進会議において総括評価を行った結果、3年間の人的育成について次のように評価した。

- ・ 学生に対しては、自主学修の増加、自己の学習における特徴(良い点、欠点)を知る機会となった。
- ・ 教員に対しては、継続的な F D 活動、カリキュラムと学年末の OSCE による専門領域を超えた相互理解につながった。
- ・ 市民に対しては、模擬患者として大学が社会活動の場、大学教育の公開の場を提供し、市民参加の教育システムが構築された。

本学は、平成 23 年度に大学評価を受けるため、大学基準協会に「自己点検・評価報告書」を提出しているが、当該報告書の教育方法の項において、OSCE の実施により学生の質を検証・確保している旨を評価している。

#### ④. 財政支援期間終了後の取組 【1ページ以内】

3年間の実施を経て明らかになった課題について、今後次のように検討していく。

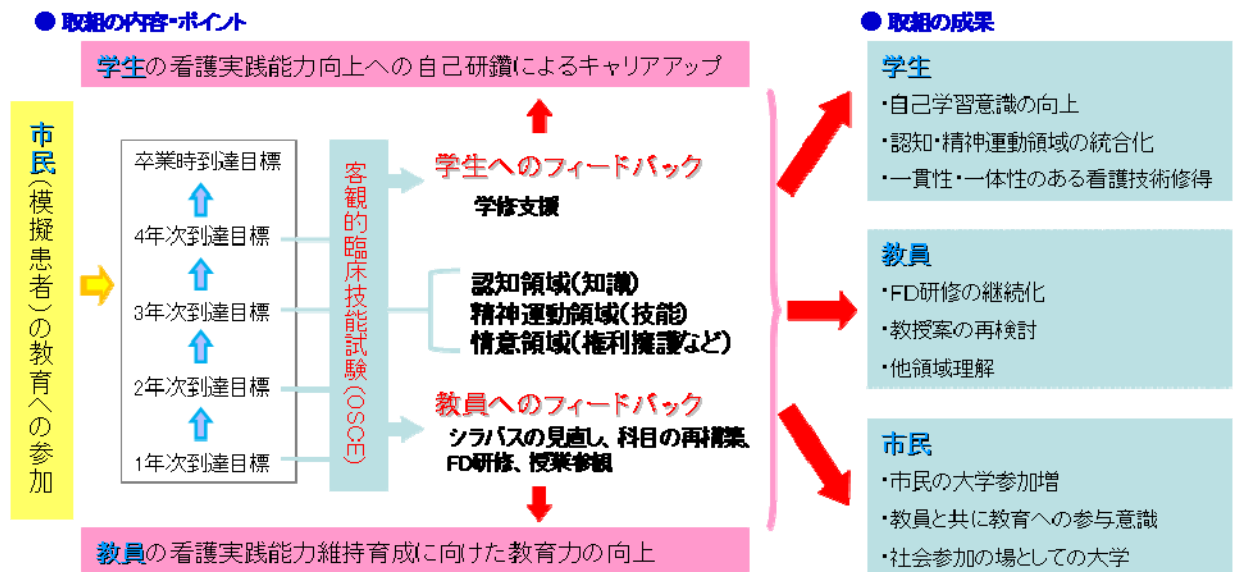
- ・ 学年別到達目標（GIO、SB0）の修正  
学年別到達目標を平成19年度に作成したが、3年間の実施結果により修正した方がよい一般目標（GIO）、行動目標（SB0）が明確になったこと、また、大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告書を参考に、修正を検討する。
- ・ 学生の自主学修を促す教育環境の整備  
学生の自主学修のため配置したインストラクターは、教育GPの補助金により雇用していたが、今後の確保については大きな課題である。
- ・ OSCE課題の公開  
平成22年度から、各学年学生に対し実施済みの課題の公開を開始したが、今後はさらにシナリオを精選したうえで、評価項目も精選して公開することを検討する。
- ・ 模擬患者の活用と新たな養成  
模擬患者がOSCEのほか演習授業にも参加することにより大きな効果を得ているが、模擬患者一人当たりにかかる負荷が増大することから、継続活用とともに、新しい模擬患者の養成が必須になる。また、これまでの札幌市立大学模擬患者としての養成方法から、どのような発展型があるか検討する必要がある。
- ・ カリキュラムとOSCEの更なる検証  
平成24年度のカリキュラム検討と合わせ、カリキュラムとOSCEについて検証する予定である。
- ・ 財政支援終了後のOSCEの継続  
実施体制を縮小して継続する方向である。そのために必要な費用は、学内の教育経費から可能な限り捻出する予定である。

今後の発展は、大学における基礎教育と臨地現場における臨床教育の継続（一体化・一元化）へ向けた取り組みを考えている。

平成22年度から5年間の予定で、文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」に、「学社連携による循環型就業力育成プログラムー大学と地域社会（関連施設）のシームレスな連携による就業力育成ー」が選定されたことから、教育GPで得られたシステムや成果をこの事業へ接続し、実践ナースのOSCE実施への発展を目指す。

## 2. 取組の全体像 【1ページ以内】

本事業の概要と成果



今後の展開

